

常照

佛教大学附属図書館報

2016

NO. 63



佛教大学附属図書館



蔵書検索とカードボックス

附属図書館長・仏教学部教授
松田 和信

皆さん、図書館へようこそ。紙からデジタル・データへ、このように言われるようになってから随分経つような気がします。1991年から2年間、私はオランダ・ライデン大学のインド・イラン学科に留学しましたが、学科の図書室だけでも膨大な図書が所蔵されていました。大学の中央図書館となると本学図書館の何倍の規模であったか思い出すのも困難なほどです。しかし蔵書を検索するには、書庫に入って直接探すか、カード目録で調べるしかありませんでした。ネットもメールもなかった時代でしたが、わずか25年前の話です。今では世界の著名大学の蔵書も日本にいながらネットで簡単に検索できます。書き写しの時代から印刷の発明、そして現代に至る数千年の書物の歴史に比べると、この四半世紀の変化は驚異的です。

現在の図書館で利用できる資料には様々な形のものがあることは皆さんも御存知でしょう。この数年は、電子ジャーナルなどの電子媒体の契約料が図書購入に当てる費用を上回る勢いです。今後この流れが逆転することはないでしょう。そうなる、大容量のコンピュータあるいはインターネットに繋がる端末さえあれば済む話であって、やがて図書館とい

う空間すら必要としない時代が来るのかもしれない。

ところで、図書館の重要な仕事のひとつは書誌情報を記した蔵書目録の作成です。ネット時代になってもそれは変わりません。異なるのは、カード目録がオンライン蔵書目録OPACに代わったことです。本学の図書館にOPACが導入されたのは成徳常照館に現在の図書館がオープンした1997年でした。さらに昨年からはOPACに加えて、学術情報検索BRIDのサービスも開始しました。これによって皆さんのパソコンやスマートフォンから、図書館の蔵書に加えて、ネットで繋がる世界の情報にアクセスできるようになりました。しかし、OPACが導入されたことで、蓄積された膨大な目録カードと収納ボックスは無用の長物となってしまいました。ただ、廃棄するのは勿体ないですから、ボックスだけは入館ゲート横の空きスペースに積み上げて、インターネットとして再利用することにしました。ラベルには、世界中の「こんにちは」と「さようなら」の文字をプリントしました。世界各国の「本」という語も加えました。皆さんも図書館に入る時には是非一歩足を止めて、本学図書館の歴史に思いを馳せていただけたらと思います。



佛教大学附属図書館報

2016 NO. 63

目次

蔵書検索とカードボックス

附属図書館長・仏教学部教授 松田和信

1

私の研究事始 恩師に導かれ

仏教学部仏教学科准教授 伊藤真宏

2

Interview

絵本を通して広がり続ける縁の世界

社会福祉学部社会福祉学科准教授 林悠子

6

研修中に再確認した図書館機能

歴史学部歴史学科教授 西川利文

10

新収資料紹介 「近江屋仁兵衛家文書」

『洛中洛外町々小名 大成京細見絵図』

『洛陽四十八所地藏霊場巡禮利生記』

図書館専門職員 尾下仁美

14

講演録 平成27年度(第50回)佛教図書館協会総会研修会

椰子の葉からデジタルデータへ

附属図書館長・仏教学部教授 松田和信

20

佛教大学附属図書館の事業活動報告 2015~2016年度前半期

24

佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来

25

私の研究事始

恩師に導かれ

仏教学部仏教学科准教授

伊藤真宏

私は現在、法然文献をもとに、思想の解明や法然伝の研究に携わっている。その研究については、論文などを参照していただくとして、私が研究に足を踏み入れるきっかけになったのは、少し毛色の異なるものである。とはいっても、研究方法としては、文系の研究だから、それほど違うものではない。現在の法然研究に携わるについて、それ以前の研究が私に重要な示唆を与えてくれていることは間違いない。その、以前の研究に関して多大な影響を受けたのは、関山和夫先生。大学院から指導教授としてお世話になり、大学院を終えて以後も公私にわたってご指導を頂戴した。

佛教大学を定年退職され、名誉教授として後進の指導をいただいていた時、京都西山短期大学の学長に請われ、就任された。その際、非常勤講師として来るようにと私に要請され、先生が学長職にある間、ご一緒させていただいた。認めていただいているのだと素直に喜んだ。

京都西山短期大学の仏教コースは、西山浄土宗、浄土宗西山禅林寺派、浄土宗西山深草派、いわゆる西山三派の僧侶を養成するコースで、西山三派の教学思想については、当然専門家がおられるが、先生は学長に就任するにあたって、その専攻科に浄土



日本における浄土教思想は、日本に仏教が流入した頃から入っていたと考えられる。日本へ仏教が伝えられたのは西暦538年。百済の聖明王が仏像と經典論疏を朝廷に贈呈してくれたことを以って、仏教公伝としている。これは『上宮聖徳法王帝説』や『元興寺伽藍縁起并流記資材帳』に基づくものだが、『善光寺縁起』では、このときの仏像を阿弥陀如来とし、外来の「カミ」を受け入れたので、疫病などが流行るのだと反対した物部氏によって、最終的にこの阿弥陀如来像は大阪湾に捨てられ、それを本田善光が拾って信濃国に持ち帰り、建てたのが善光寺と説く。つまり、日本に初めてもたらされた仏像が阿弥陀如来、ということになる。また奈良朝写経にも浄土經典は散見され、浄土教思想は仏教伝来当初から日本に入っていた。平安時代に最澄が天台宗を、空海が真言宗を開創するが、天台宗では円仁が中国から五台山の念仏を持ち帰って常行三昧を盛んに行

系各宗派の専門家を講師として配置して、日本における浄土系各宗派教学が全て学べる唯一の仏教コース、というのを目玉施策にされ実現された。私はその一人、鎮西派の教学を担当すべくお声がけいただいたわけである。



なうようになり、その後、源信が『往生要集』を著して天台浄土教を確立。その流れの中で法然が出現する。法然は専修念仏を提唱して浄土宗を開宗、比叡山を後にした。法然の元には多くの人が集まったが、門弟に聖光、證空、親鸞らがいる。聖光の流れが現在の浄土宗鎮西派となり、證空の流れが現在の西山三派、親鸞の流れが現在の浄土真宗本願寺派や真宗大谷派などになる。また證空の門弟の中から時衆（時宗）が発生し、天台宗の良忍を祖として融通念仏宗が生み出され、融通念仏宗は歴史の流れの中で浄土宗鎮西派の一部となり独立したりして現在に至っている。つまり日本で念仏を称える主要宗派は、ざっと、浄土宗鎮西派、西山三派、浄土真宗や真宗、時宗、融通念仏宗、そして天台宗となる。さらに天台真盛宗や黄檗宗でも念仏を称えるが、念仏を称える行為は同じでも、思想的には厳密に違いがあり、それぞれ専門家も存在する。例えば本学では鎮西派の専門家、京都西山短期大学は西山教学の専門家、龍谷大学には浄土真宗の専門家、大谷大学には真宗の専門家、大正大学には天台宗や浄土宗の専門家が所属している。しかし、同じ念仏だからと言って、その枠を超えて他の宗派の講座を開講している例はあまりない。そういった当時の現状の中で、京都西山短期大学は、西山三派はもちろんだが、浄土宗鎮西派、浄土真宗、真宗、時宗、融通念仏宗の講師陣を備え、浄土系各宗派教学を学べる体制を整えられた。多少隣接する宗派の講義を一つ二つ設定されることはあっても、浄土系各宗派教学を全て揃えての講座も持たれたのは、当時、恐らくどの大学にもない画期的なことだったと思う。



1989年撮影：佛教大学大学院での授業風景

【関山和夫先生略歴】

せきやまかずお 関山和夫

1929年(昭和4)生まれ。1952年3月、大谷大学文学部卒業。東海学園女子短期大学教授、佛教大学文学部教授を経て、京都西山短期大学学長。佛教大学名誉教授。龍谷大学、同朋大学、大正大学、大谷大学などの非常勤講師を歴任。

〈専攻〉日本文化、仏教文化(仏教文学・仏教芸能)

〈業績〉1964年、『説教と話芸』(青蛙房)で第十二回日本エッセイストクラブ賞受賞。1976年10月、「説教の歴史的研究」で大谷大学より文学博士。1977年、「話芸研究の業績」に対し、芸術選奨文部大臣新人賞受賞。1984年「話芸研究会“含笑長屋”落語を聴く会の主宰」に対し、愛知県芸術文化選奨文化賞受賞。国立劇場演芸場運営委員、愛知県文化財保護審議会委員、名古屋市文化財調査委員会委員、名古屋芸能文化会顧問を歴任。著作・論文多数。

2013年(平成25)5月9日示寂。享年85(満83歳)

関山先生の著書



岩波新書『説教の歴史』 岩波書店 1978

これは、関山先生の博士論文であり、後に法蔵館から出版された『説教の歴史的研究』という集大成の研究結果を、コンサイズにまとめたもの。コンサイズと言っても、学術的なレベルを下げたものではなく、先生の解明された事柄を漏れなく網羅していて、今日につながる「話芸」の歴史を源流から述べる。様々な伝承話芸が、仏教に端を発することが知られる。



『落語風俗帳』 白水社 1985



『落語食物談義』 白水社 1986

関山先生の研究は、「説教」を歴史的に追突したが、その過程で、落語の源流が、説教にあることを突き止めた。その副産物というべきか。落語の発掘や保存にも力を注がれた先生のあくなき興味から生まれたのが、この二冊。落語に登場する人や、風習、服装、そして食べ物に焦点をあて、庶民のありようが活写されている。学問から飛び出して、一般の読み物としても十分面白いこれら二冊は、先生の幅の広さ、底の深さを感じさせる。

関山先生は、そんな、やればいいのに、なかなかできないことを、愚直に進まれ実行される先生だった。

私の大学院での研究課題は「和讃・御詠歌」を取り上げた。和讃の研究については、多屋頼俊著『和讃史概説』という不朽の名著があった。和讃の発生から歴史を全て網羅した前人未踏の研究で、多屋先生は関山先生の恩師。和讃の研究をしたいという私に縁を感じ、指導教授となってくださった、と後になつて聞いた。そういう和讃の完成された研究がある中で、私は、日本仏教の中で和讃が果たした役割を炙り出すことを目指した。

仏教はそもそも、インドで釈尊が覚ったことによつて始まった。釈尊の教えは釈尊自身が説くことで広まる。35歳で成道された釈尊は、80歳で亡くなるまでの45年間、たゆまず教えを説き続けられた。釈尊寂後、人々に個々に説かれた教えは集約され、「経」が成立する。その時は文字化されず暗誦され記憶されていた「経」が、やがて文字化され、文字化された「経」が、国境を出て翻訳され、仏教は世界宗教へと変貌する。ガンダーラからシルクロードを経て中国に伝道された仏教は、訳経僧により中国語に翻訳された。漢訳經典の中国仏教は、唐の時代に飛躍的に発展する。その中国仏教が朝鮮半島を経て日本にやつてきた。当初の日本では經典を翻訳せず、漢訳經典をそのまま受容。その中国語である漢訳經典をそのまま理解できる一部の人が仏教を信奉

したという点で、両者は共通しており、足跡を遺されている。和讃の研究は、多屋先生以後も、様々な研究者によつて研究論文が発表されているが、新出資料などによる新たな研究というわけではなく、いずれも多屋研究の範疇を出ていない。私の研究も、鎌倉仏教における和讃の再評価、という意味では新知見であるが、未だ解明されていないことを明らかにしたと言ひ難い点で、私は、不肖の弟子である。関山先生にとつて、和讃を研究したいという私の申し出は、一面、先生にとつて縁を感じることであったのだけれど、一面、研究としては既に解明されたことであつて、新たな切り口であつても、歴史に足跡を残すスケールの大きな研究ではないという意味で、大学院で弟子を育てるということでは悩まれたのではなかったか、と今は思う。

一人一人の研究は「点」である。点と点が繋がつて線となる。点が多ければ多いほど複雑な、鮮明な線が引け、優美な曲線も描け、もっと集まつて流麗な写真のようにさえなる。ドットが集積である画素数の高いデジタル画像を想像されたい。

「現在」ということが今の一瞬とするならば、我々の一切の事柄は過去の現象と言えよう。その意味で、一切の研究は、一つ一つの過去の事実の解明であり、また、研究こそ、歴史を明かし、また歴史を正確に記録する唯一の方法であらう。その一つの「点」を責任を持って闡明するのが、学徒の使命である。そしてそれが闡明された時は、歴史の正確な記録、と

した。そういう状況は長く続き、平安仏教にあつても法要仏事は基本的に漢訳經典だったが、天台宗において、和讃が発生、その影響下に、法然を始めとする鎌倉仏教の祖師が和讃をこととする状況を見出すことができる。つまり、鎌倉仏教において庶民にまで仏教が浸透するのに、和讃が果たした役割が多大であり、さらに言えば、和讃によつて日本仏教は、真に「日本仏教」となつた、ということを立てしようというのが、私の研究であつた。

関山先生は、私のそのような目論見に賛同してくださり、研究の方向性は良いから、資料をしつかり押さえ、読むように指導された。関山先生の研究は、日本仏教における「説教」を釈尊の時代の仏教から網羅的に研究し、その歴史を明らかにしたもので、何と言つても圧巻は、落語が仏教の説教から端を発したものであることを解明したことであらう。安楽庵策伝著『醒睡笑』に、落語の原形を見られた先生の慧眼は、その広範囲な興味と読書量があるからこそである。一般論として、仏教の説教を研究をしていて、落語につながるとは考えない。落語に深い関心があつた先生だからこそ業績と言える。やればいいのに、なかなかできないことを、愚直に進まれ実行される態度は、研究で培われたのかも知れない。そして資料によつて立証していく作業がいかに重要であるか、ということを示された。

和讃についてのあらゆる研究は多屋先生によつて、し尽くされていた。弟子の関山先生は、説教の研究では前人未踏。師と弟子はともに、後にも先にもない研究を打ち立てた。「和讃」「説教」という課題についての歴史を、資料に基づいて網羅的に解明

という人類への貢献が可能になる。さらにその「点」が多ければ多いほど鮮やかな描写となるのであるから、たとえ小さな点であつても、意味のある研究であり、あらゆる研究が必要となる。

図書館が大学における中枢、と位置付けられるのは、その歴史の正確な記録の宝庫であるからである。研究は常に瑞々しさを保つべきであり、過去から最先端の情報が集積されているのが、図書館である。思えば、私は大学での卒論の準備の頃から現在まで30年以上、図書館にはお世話になりっぱなしである。関山先生のように、一つの「点」を担つて学問で人類に貢献するのが、学徒としての私の目指すべき山とすれば、愚鈍にして凡夫の私には、あまりにも高い山である。山すそをうろつろしているに過ぎない。しかし、法然思想を正しく理解し、事実としての法然像を明らかにしていくことは、私の担う「点」であり、関山先生のお姿を思い出しつつ、かつての和讃・御詠歌の研究方法をも活用して、山の高みを目指し、今日もまた図書館にお世話になるのである。

関山先生の著書



伊藤真宏
仏教学部仏教学科准教授

佛教学部大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。研究分野は、浄土宗学、日本仏教文化史。論文等に「法然の起請文―特に「七箇条起請文」について」(佛教学部仏教学部論集100、2016年)、「法然法語の出典―「つねに仰せられる御詞」について―」(佛教学部法然仏教学研究センター紀要1、2015年)、『徒然草』における法然法語の意味」(西山学苑研究紀要9、2014年)などがある。

Interview

絵本を通して広がり続ける縁の世界

社会福祉学部社会福祉学科准教授 林 悠子

学生と一緒に取り組まれている
絵本の活動についてお聞かせください。

私が着任した当時、佛教大学では「縁（えにし）コミュニティ」のプロジェクトが全学的に展開されていました。社会福祉学部でも学生有志で学びの共同体を組織しているような取り組みを行おうということになり、黒岩晴子先生にアドバイスをいただき、社会福祉学部縁プログラムの一つとして2010年にスタートしたのが、「縁子どもグループ」による絵本を活用した活動でした。

「縁子どもグループ」のメンバーは学年を問わず募集し、学生たちとともに毎年継続して絵本展の開催や絵本の読み語りなどの活動を行ってきました。グループの活動は、学生たちにとって、大学内だけでなく地域ともつながりながら、多様な立場の人々と交流を深め、ゆるやかなつながりの中で協働の楽しさを経験する貴重な機会になっています。

2010年の絵本展が 最初の取り組みですか？

「縁子どもグループ」による最初の活動は、2010年11月の「ハロー・ディア・エネミー展」の開催です。「ハロー・ディア・エネミー」とは、「こんにちは、敵さん」という意味。世界が直面している「紛争」という大きな

その後も継続して絵本展を 開催されてきたのでしょうか？

2014年まで毎年秋から冬にかけて「世界のバリアフリー絵本展」を行い、2015年は「いのちと平和の絵本展」を開催しました。学生にとって、協力し合って一つの企画を形にできたこと、絵本を通じて人とつながる経験から得た学びは大きく、活動を継続してさらに発展的に展開していきたいという思いから企画されたのが「いのちと平和の絵本展」です。

2014年までの絵本展は日本国際児童図書評議会のお世話になりながら開催してきましたが、「いのちと平和の絵本展」は、テーマの設定から展示する絵本の選定まで、学生たちが自ら行ったところに大きな意義があります。2015年は戦後70年という節目でもありました。また、社会福祉には「い

のち」や「平和」の理念が根底にありますから、学生たちの間にごく自然なかたちで「いのちと平和の絵本展」というタイトルが浮かんできたようです。選書にあたっては、まず図書館の絵本コーナーで下調べを行い、その後書店に行ったり、自宅に眠っていた思いの絵本を持ってきたり、各自工夫をしていました。

選書に2カ月から3カ月ほどかけ、一人ひとりが探してきたものを持ち寄って展示する絵本を約50冊に絞り、その一冊一冊にそれぞれの絵本の魅力や平和に対する学生たちの思いをPOPに書き添えて展示しました。いのちや平和に対して学生たちがどう思ういや考えをもっているのか、そのことを私自身もあらためて気づかされる絵本展でした。

事前の告知も学生たちが行いました。手づくりのチラシを近隣の小学校、保育所、幼稚園などに分担して配付したり、書店や



郵便局にはポスターにして掲示していただきました。動画でコマージュを作ったり、SNSをアップしたり、SNSを通して発信した学生もいたようです。おかげで多くの方にお越しいただき、大人も子どもも楽しめる素敵な絵本展になりました。

翻訳がついていないものもありましたが、それぞれの絵本に学生のコメントを添えて展示しました。

翌2011年に「世界のバリアフリー絵本展」を開催しました。この絵本展も日本国際児童図書評議会が推薦する「読書に障がいがある青少年のための絵本」の巡回展として開催したもので、「縁子どもグループ」の学生たちが主体的に運営しました。

絵本展には聴覚や視覚などに障がいのある子どもたちも読めるように工夫された世界各国の絵本が展示されましたが、どの本もだれでも楽しめるものばかり。できるだけくつろぎながら楽しんでもらえるように、紫野キャンパス1号館の5階にある40畳ほどの和室を会場に選びました。畳の部屋であれば靴を脱いでゆっくりできます。自分の部屋にいたような感覚で寝転がって読んでもらってもいい。そういう考えから、以来、学内で行う絵本展はこの和室で毎回開催しています。

絵本展の期間中は、読み語りやオリジナル絵本作りのコーナーなども併設しました。読み語りには、展示絵本だけでなく図書館の絵本も活用しました。テーマに近い絵本を学生が選んでいました。学生、教職員だけでなく、地域の子ども連れの方なども多く来場され、実際に絵本を手にとったり、家族にプレゼントする絵本を作ったりと、ゆったりした時間を過ごしていただきました。

**絵本展に來られた方の反応は
いかがでしたか？**

「いのちと平和の絵本展」においても会場
で子どもたちに読み語りをしたり、クラフト
コーナーなどを設けたりしたのですが、来場
した保護者の方や保育所や幼稚園の先生か
らは、「大学での学びを生かした素晴らしい
取り組み」であるとか、「いのちや平和につ
いてあらためて考えるいい機会になった」「絵
本が大人になっても心を豊かにしてくれるも
のであることがわかった」といった声をいた
だきました。また、「来年もぜひやってほし
い」「1年に一度ではなくもっと定期的にやっ
てほしい」と語られた方も多くいました。

「ハロー・ディア・エネミー展」「世界のバ
リアフリー絵本展」「いのちと平和の絵本展」
は学内で行ってきましたが、地域の人にもつ
と絵本にふれてほしいという思いから、佛教
大学と地域連携協定を結んでいる北野商店
街(京都市上京区)に設けた本学拠点施設「ゆ
いまる」で学生が選んだ絵本を展示する
「子ども絵本展」を開催したこともあります。

「縁子どもグループ」による活動は、「社
会とのつながりや、社会とつながる力を養成
する」ことを最終的な目的とする「縁コミュ
ニティ」のプロジェクトとして出発していま
すし、地域の人々からの要望も多いので、今
後も継続して絵本展の開催を続けていきたく
いと思っています。また、図書館と連携した

すべての人が楽しめる文化財です。学生たち
にはその魅力を、これからも多くの人に伝え
続けていってほしいと思います。

**今後の活動に期待しています。
最後に図書館活用についての
アドバイスをお願いします。**

図書館にも絵本コーナーがあります。保
育や教育や福祉を学ぶ学生だけでなく、す
べての学部の子生たちに利用してもらいたい
と思いますね。現在、新着図書コーナー前
に絵本を展示されていますが、学生が「あ
この本小さい時好きだった!」と手に取って
いる姿を見て嬉しくなりました。

図書館の書棚にはたくさん本が並んで
います。お目当ての本を探しに行つて、たま
たまそのそばにあった本のタイトルが目が留
まって、少し広げてみたら面白くて……とい
うような偶然的出来事が、自分の世界や可
能性を大きく広げていくきっかけになること

絵本に関する活動も企画したいです。

**「読み語り」の活動にも積極的に
取り組まれているようですね。**

絵本展で毎回読み語りを行っていますが、
絵本の楽しさをより知っていたくために、
さまざまな場所で絵本を活用した活動も
行っています。

訪問先の一つになっているのが、紫野キャ
ンプスの南隣、千本北大路交差点の一角に
ある「100KITA (Kyoto Innovative Trial
Apartment)」です。ふまこでは市営団地
の再生に向けてさまざまな新しい試みが行
われていますが、昨年そこに新しく誕生した
カフェやリーススペースも活用させてもらっ
ています。また、古本市を開いたり、その会
場で紙芝居なども行いました。また、「北い
きいき市民活動センター」とも連携して、「ミ
ニ文化祭」でのお話会を行いました。

二条キャンパスでも、地元のNPOが二条
駅周辺の子育て世代を対象に行っていた「絵



もあります。

ぶらつと図書館に立ち寄って、のんびり書
棚を眺める。ただそれだけでも図書館の有
意義な利用方法だと思います。時間があ
るときには静かな閲覧室の中でゆっくり本を
読んでください。図書館を思索の場にする
のもいいでしょう。自分を豊かにしてくれる
場所、贅沢な寄り道ができる場所、それが
図書館だと私は思います。大いに利用して
ほしいと思いますね。



はやしりつこ
林悠子
社会福祉学部社会福祉学科准教授

大阪府立大学大学院人間社会学研究科博士後期課
程単位取得満期退学。論文等に「保護者と保育者
の記述内容の変容過程にみる連絡帳の意義」(保
育学研究 第53巻第1号、2015年)、「保育の『質』
の多様な理解から見た『質』向上への課題」(佛
教大学福祉教育開発センター紀要第11号、2014年)
、「保育の『質』として語られてきたこと」(佛大
学社会福祉学部論集第10号、2014年)などがある。



アメリカの保育者養成テキストの日本語版。保育室の環境が子どもたちの美的
感覚や審美眼の醸成に与える影響など、日本ではあまり紹介されていない新
しい知見が盛り込まれています。佛教大
学の図書館にも収められているので、保
育を学ぶ学生にはぜひ読んでほしい一
冊です。

本ひろば〜親子で絵本
を楽しもう〜の活動
に参加させていただき、
絵本を読んだり手遊び
したりして子どもたち
と楽しい時間を過ごし
ています。



**地域とのつながりも
広がりつつあるようですね。**

ある幼稚園の園長先生から、「今度クリ
スマス会をするので、何かやっていただけませ
んか?」という電話を突然いただいたこと
があります。経緯を伺うと、その園に通う
お子さんの保護者の方から、親子で参加し
た佛教大学の絵本展の素晴らしさを聞き、
それならばぜひクリスマス会で学生さんにお
話してほしいということだったので。

学生たちの絵本を通じた活動によって、
新しい出会いやつながりや交流が次々生ま
れています。

子どもの頃に読んでもらって好きだった話
は、いつまでも記憶に残ります。大人になっ
て読み返してまた感動がよみがえったり、子
どもの頃とは違う心への響き方をすることも
あります。絵本は、子どもだけでなく、す

**林先生
お勧めの
一冊**



「世界のバリアフリー絵本展」
で展示した一冊。「まるる」を
使って遊ぶ参加型の絵本。谷
川俊太郎さんの訳で言葉も
おもしろく、頭がやわらかくな
ります。



「いのちと平和の絵本展」で
展示した一冊。主人公のちい
ちゃんがかつて先に亡くなっ
た家族のもとに旅立っていく
話。戦争の悲惨さが痛いほど
伝わってきます。



森永と素ミルクの被害者であ
るはせがわ君が、友だちの目
から描かれています。福祉に
関わる人には何か必要な
か。そのことをあらためて考
えさせられる一冊です。



子どもの「つばき」を集めた
一冊。将来、保育や教育に携
わる学生たちには、ここに収
録されているような「つば
き」をきちんと受け止めるこ
とのできる先生になってほし
いですね。



歴史学部歴史学科教授

西川利文

研修中に再確認した図書館機能

はじめに

昨年度一年間（二〇二五年四月一日～二〇二六年三月三十一日）、教育職員研修規程に基づいた研修（「一般研修」を認めていただいた。一般研修なので特に研修先は定めず、自宅をベースとして、大学研究室での研究や海外（中国）での遺跡訪問など、充実した研究活動を行った。その間、当然のことながら、幾度となく本学図書館を利用した。その中で、筆者が専門とする東洋学関係の図書の充実を再確認するとともに、図書館ポータルサイト「BRD」を通じた情報検索の充実ぶりを実感した。本稿では、この2点を中心に、研修中に感じた本学図書館の図書館機能について記してみたい。

リアルな図書館機能 東洋学関係図書を中心とする 図書収蔵の状況

今回の研修で掲げた研究課題は「戦国・秦漢・三国期における官僚制の研究」である。西北地域や長江流域を中心に、中国各地から出土する文字資料に見える官僚制関連の資料を整理しながら、戦国～三国期における官僚制の問題を検討しようという目論見であった。

さて、近年の中国古代史の研究においては分野に関わりなく、文献史料に加えて、木簡・竹簡（簡牘）あるいは帛書といった出土文字資料が、研究の基本史料となつている。それに関する発掘報告書・図録等や研究書も、「中国書を中心に」増える傾向にある。これらの図書は大部のものが多く、金額的にも、スペース

的にも、個人で収集するには限界があり、図書館本来の図書収集機能に期待したいところである。

この点について、本学図書館はかなりの部分を揃えてくれていて、あまり不都合を感じないレベルになつている。これは、史学科創設（一九六六年）以来、東洋学関係の和書・中国書を意図的に収集してきた伝統に裏付けされているものだと考える。そこには、平中文庫をはじめ個人の寄贈による部分もあるが、特に中国書については、文革（一九六六～七六年）の影響もあつて購入困難な時代にも、中国書専門店を通じて積極的に購入してきたこともある。それ以来、収書に当たる教員が幅広く必要図書を精選しながら集めてきて、現在に至っている。その結果、同一図書を複数冊置かないことがルール化された現在でも、図書館をはじめ、歴史学部資料室や中国学科資料室など、どこかに必要な図書の多くが存在する状況となつている。特に筆者の研究課題との関連でいえば、地下一階書庫（B層）を中心に、出土文字資料関係の発掘報告・図録の類が潤沢に所蔵されているのがあるがたい。恐らく本学図書館は、国内大学の中でも有数の中国学関係の図書（和書・中国書など）の所蔵数を誇るといえる。

とはいえ、当然のことながら、様々な理由により本学図書館に所蔵していない図書もある。その際、当該図書の購入を図書館に依頼するという方法もある。しかし、急いでいる場合や、絶版等で購入不能の図書などについては、所蔵している図書館からの「現物借用」が便利だと感じた。

筆者の事例でいえば、所蔵機関の少ない『術数学の射程：東アジア世界の「知」の伝統』（武田時昌編

京都大学人文科学研究所（二〇一四年）や、二〇年ほど前の刊行で購入不能な『古代交通と地理文献研究』（辛徳勇著、中華書局、一九九六年）である。前者は、戦国・秦漢時期の下級官吏たちが、日常生活の中で行っていた占いの類（術数）を考える手がかりのため、後者は漢代長安城の機能について調べるために必要だった。いずれの図書も一週間以内に届けられ、図書館内での閲覧という制限はあるものの、速やかに手に取ることができて大いに助かった。わざわざ他大学の図書館まで出向かなくても、「多少費用がかかるもの」本学図書館で閲覧できるのは、結果的に時間の節約になると考える。

昨今の大学図書館を取り巻く状況は、必ずしも良好ではない。財政的には、多くの大学において縮減傾向であるし、またスペース的な問題もあり、有用な図書があつてもすべてを二大学で揃えることは無理である。そこで、近辺の複数の大学と共同して戦略的な購入を行つてはどうだろうか。そうすれば、従来からある大学図書館同士の相互利用の仕組みが、さらに活性化するだろうし、特に今回有用性を実感した「現物借用」の制度が、より充実していくように思う。

バーチャル空間としての図書館機能 BRDの有用性

研究・教育の拠点として図書をはじめとする現物の諸資料を収集・収蔵し、利用者の便に供するのが、図書館の第一義的な機能であらう。いわばリアルな空間での図書館の存在意義である。しかし、インター



ネットの発達により、現物の収蔵だけではなく、オンライン上での情報の発信や情報の提供等、実際の図書館に行かなくても利用できる、図書館機能が重要度を増している。いわばバーチャルの図書館機能である。その最たるものが、本学では「BRD」というポータルサイトである。

「BRD」は、Bukkyo university library's Information & Research Databases、の略称であるが、その名称が示すように、図書館の情報と調査・研究に必要なデータベースが集約されているオンライン空間である。これによって我々は、実際に図書館に足を運ばずとも、図書館の様々な機能を利用することができる。

その第一は、蔵書の有無を確認するための蔵書検索 (OPAC) の機能だろう。これによって本学所在の有無を確認できるが、その際、書名のフルタイトルを入力するのが確実であるものの、キーワードや著者名で検索すれば、目的の図書以外の関連図書が見つかる場合がある。そして目的の図書が見つかったら、実際に配架場所に行ってみると (近辺に近接する図書が配架されているので)、さらに検索ではヒットしなかった関連図書を見つけれられる場合がある。検索というバーチャルの空間で見当をつけ、実際に配架場所というリアル空間に行く。このバーチャルとリアルの往還によって、新たな発見がある。筆者の例でいえば、前に示した術数学には暦学も関連するので、その関係の図書 (請求記号 449 番台) を探していたところ、天文学分野 (440 番台) などで意外な発見があった。

さて「BRD」の本領は、多彩なデータベースを集べての情報を収録できているわけではなく、筆者の場合はオンライン版の「東洋学文献類目」(京都大学) や「MAGAZINEPLUS」など、複数のデータベースに当たるようにしている。

最後の「CNKI」は、中国 (大陸) の學術雑誌掲載の論文を検索し、ヒットすればダウンロードできるデータベースである。実は、研修期間中にもっとも活用したのは、この「CNKI」である。いわゆる「文史哲」関係の論文に限られるが、本学に所蔵していない學術雑誌の論文を多く入手することができた。それに加えて、博士等の学位論文を入手できたのも大きかった。これは、研究室の端末ではダウンロードできないが、図書館の参考調査カウンターでダウンロードしてプリントアウトしていただいた。一つは『史官主書与秦書八体』(徐学標著、山東大学) という博士論文で、これは前掲拙稿「漢代の「史書」執筆の際に参照した。もう一つは『兩漢公府属吏研究』(程林著、湖南師範大学) という修士 (碩士) 論文で、これも拙稿「曹操の辟召」(『歴史学部論集』6号) 執筆に際して参照した。それ以外にも、いくつか研究室の端末でダウンロードできない論文を、図書館でプリントアウトしていただいた。

ここに挙げた三つのデータベースをはじめ「BRD」に集約されているものは、ほとんど大学が契約を結んだ有料のデータである。従って、通常学外から各データベースにアクセスした場合、個人で費用を負担しなければならぬ。それを、学外にいても学内での環境を確保してくれるのが「BRD」の「リモートアクセスサービス」である。これは「BRD」トップページ右上にある「リモートアクセスサービス」(前

ポータルサイト「BRD」の「リモートアクセスサービス」をクリックし、ログインすれば、自宅や外出先のパソコンからでも学内専用のデータベース、電子ジャーナルへのアクセスが可能になります。



約している点であろう。ここを足掛かりに、多様な術事情報データベースにアクセスできる。そのうち、筆者が普段からよく利用するものを中心に紹介しておこう。一つは全国の

大学図書館の所蔵図書を検索できる「Cinii Books」もう一つは日本で刊行される學術雑誌に掲載された論文を中心に學術論文の情報を検索できる「Cinii

頁画像のオレンジ色のボタン) を選び、IDとパスワードを入れてログインすれば、学内で「BRD」を使っているのと同じ環境が、(ネット環境が整っていれば) 国内外どこにいても再現される。このサービスの有用性を、研修期間中に改めて実感した。

おわりに

「BRD」は「術情報収集や論文・レポート作成のための佛教大学図書館サイト」と銘打っているように、改めて言うことではないかもしれないが、教員・院生等の研究のみならず、学生の学習・教育にも役立つ図書館機能の総合サイトである。そのような性格のサイトであるから、今回取り上げた利用方法以外に多様な活用方法がある。例えば「お気軽検索」の機能は、OPACによる書籍、データベースなど電子のコンテンツ、新聞記事等の関連項目を、ひとつの窓から網羅的に検索し情報として提示してくれる。この点については『常照』第62号(二〇二五)に詳しく紹介されているし、「BRD」に収載される情報は更新されるので、図書館が発行する『図書館利用案内』や本学図書館のHPなども参照してもらいたい。

今回、一年間の研修で頻繁に図書館を利用

Articles」そして三つめは中国 (大陸) で刊行された學術雑誌掲載の學術論文を中心に検索できる「CNKI」である。

「Cinii Books」は、本学図書館が所蔵しない図書 (雑誌を含む) を所蔵する大学図書館を探すのに便利で、和書ばかりでなく中国書等の情報もある。実際、前に掲げた『古代交通与地理文献研究』は「Cinii Books」によって他大学に所蔵があることを確認したうえで、「現物借用」を申し込んだ。

「Cinii Articles」は、日本で刊行されている學術雑誌掲載の論文等を探すのに便利で、特に本学に所蔵していない雑誌等の論文は、機関リポジトリ等でオープンになっている場合、ダウンロードしてプリントアウトすることができる。例えば、本学に所蔵していない『書学書道史研究』24号(二〇二四年) 掲載の大西克也「文字統一と秦漢の史書」を入手して、拙稿「漢代の「史書」

『歴史学部論集』6号、二〇一六年) の執筆に際して参照することができた。しかし「Cinii Articles」をはじめとする學術論文のデータベースは、どれもす

して、本稿で記したようにリアルとバーチャルの両面における図書館機能の充実ぶりを再確認した。特に総合カウンター (貸出・返却・参考調査) の職員の方々には、「CNKI」の利用などで親切に対応していただき、その他様々な点で大変お世話になった。改めてお礼を申し上げたい。ただ総合カウンターで、専任の職員の方々の姿を見かけることがほとんどなかったことに、若干の寂しさを感じた。

にしかわとしゆみ
西川利文
歴史学部歴史学科教授

佛教大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。文学 (博士)。学位論文『漢代官僚再生産の構造』(2011年)。論文等に「漢代の「史書」」、「曹操の辟召―事例の基礎的分析―」(いずれも『歴史学部論集』6号、2016年)、「中国古代の「史書」(佛教大学歴史学部編『歴史学への招待』世界思想社、2016年)など。



「近江屋仁兵衛家文書」

新収資料紹介 『洛中洛外町々小名大成京細見絵図』 「洛陽四十八所地藏霊場巡禮利生記」

図書館専門職員 尾下仁美

はじめに

当館では、特別収集資料として、京都に関する資料を収集している。本欄では、平成二十七年に購入した古文書「近江屋仁兵衛家文書」、刊行絵図『洛中洛外町々小名大成京細見絵図』、写本「洛陽四十八所地藏霊場巡禮利生記」といった異なるタイプの資料三点を紹介する。

近江屋仁兵衛家文書

山城国愛宕郡鷹峯の禁裏御料の庄屋、近江屋仁兵衛家に伝わった文書群で、総点数は六十五点である。

鷹峯は、本学紫野キャンパスの北方に位置する地域で、江戸後期は紫竹大門村に属した。域内には丹波と洛中を結ぶ長坂越という街道が通る。元和元（一六二五）年、本阿弥光悦が徳川家康からこの地を拝領し、光悦町ができたことはよく知られている。

本文書群は点数が少なく、年代も寛政十（一七九八）年から慶応四（一八六八）年と江戸後期に限られているものの、今後の活用が期待される資料である。以下にその概要を述べたい。



寛政11年、文政6年の「浄土宗門御改寺請并家数人別員数帳」

の帳面と、家屋数や人口を集計した「家数人別寄帳」が作成されている。ただし、寛政十一年のみ法華宗分を欠く（森田（晃）家文書「写真帳には寛政十一年の「法花宗門御改寺請并家数人別員数帳」が含まれる）。

宗門改帳の記述の一例を挙げる。



嘉永2年「浄土宗門御改寺請并家数人別牛馬員数帳」

【史料】

一 高三石五斗八升四合四勺 善兵衛（印）
 内高式石四升、去御改後同所太兵衛より譲受増
 屋敷 長十三間 借屋 梁三間
 横三間五尺 桁二間
 本家 梁二間 土蔵 二間四方
 桁三間
 屋敷 長八十間 借屋 梁二間半
 横七間半四尺五寸 桁三間半
 但此屋敷借屋共去御改後同所太兵衛より譲受増
 家数四軒

一 浄土宗 一心院末紫竹招善寺旦那（印）
 五十才 三十九才
 本人 善兵衛 妻 ゆき
 十三才 十八才
 忰 音吉 忰 善次郎
 十六才 八才
 娘 かの 娘 すて
 七才 四才
 娘 まさ 娘 とめ
 八人内 男三人
 女五人
 外万吉義去御改後死去仕候

まず本文書群は、「森田（晃）家文書」の名で京都市編『史料京都の歴史6北区』（平凡社、一九九三年）に紹介されている文書群と出所は同じである。

「森田（晃）家文書」の写真帳（京都市歴史資料館蔵）でその点数や内容を確認したところ、文書点数は全二三八点であり、そのうちの二〇点ほどが一紙物であった。当館収蔵「近江屋仁兵衛家文書」と内容を比較すると、「禁裏御料浄土宗門御改寺請并家数人別員数帳」など、寛政十一年の帳面類十点は「森田（晃）家文書」写真帳でも当館収蔵「近江屋仁兵衛家文書」でも同じものが確認できる。また、「森田（晃）家文書」には近江屋の家関係、経営関係資料が含まれているが、当館の「近江屋仁兵衛家文書」にはそれらの資料は見当たらない。

「近江屋仁兵衛家文書」は一点を除きすべて帳面で、その多くは宗門改帳である。寛政十一年、文政六（一八三三）年、天保一（一八三〇）年、嘉永二（一八四九）年、嘉永六年、安政二（一八五五）年、万延一（一八六〇）年のものが残っている。各年とも真言宗、天台宗、浄土宗などといった宗旨ごと
 「史料」は整理番号五十六、「浄土宗門御改寺請并家数人別牛馬員数帳」（嘉永二年三月）のうち、善兵衛家の部分を抜粋したものである。嘉永二年の鷹峯（禁裏御料）の戸数は五十八であった。その他に寺院が十、桂宮の屋敷が一存在した。
 善兵衛家は持高三石五斗八升四合四勺、屋敷地二、建物四軒を所持する家で、浄土宗一心院末紫竹招善寺の檀家である。なお、屋敷地のうちの二ヶ所は前の調査の後に鷹峯の太兵衛から譲り受け、持高も前回より二石四升増えた」と注記がある。

善兵衛本人は五十歳で、妻ゆき（三十九歳）、忰善次郎（十八歳）、音吉（十三歳）、娘かの（十六歳）、すて（八歳）、まさ（七歳）、とめ（四歳）の八人家族である。家族欄にも注記があり、「万吉」という人物が前回調査の後に死去しているという。
 鷹峯の宗門改帳は、持高や家族だけでなく家屋の記述があるのが大きな特徴である。【史料】にも「屋敷」の縦横の長さや、「本家」、「借屋」、「土蔵」の梁行・桁行が記されている。善兵衛の「家数」は四軒となっており、本家一、借屋二、土蔵一のみがカウントされ、屋敷は数に含まれていないことから、ここでいう「屋敷」とは建物を指すのではなく敷地を指すものと思われる。

また、鷹峯の宗門改帳には、善兵衛のような家持層だけではなく、借屋層の記述もある。嘉永二

年の段階では、家持は三十、借屋は二十八あり、戸数はおおむね同数であった。さらに、寺院・桂宮の屋敷についての記述もある。

このように、鷹峯の村民の家族、住居、寺院の規模などに関わる情報が得られる資料が数年分残っている。京都近郊の江戸後期の社会状況を窺い知ることができる興味深い資料といえよう。

なお、鷹峯の宗門改帳は、京都大学総合博物館所蔵の『鷹峰村文書』にもある。同文書群の目録『鷹峰村文書目録』京都大学総合博物館、二〇〇三年）によれば、すべての宗旨の分が揃っているわけではないようだが、安政四から六年、文久二（一八六二）年、元治二（一八六五）年、慶応二から四年の宗門改帳があるという。これらをあわせてみることで、より多くの情報が得られるだろう。

洛中洛外町々小名大成京細見絵図

木版色刷の京都の町絵図である。資料右下の刊記には「元治元甲子冬開版 皇都書林 竹原好兵衛版元」とあり、幕末の元治元年に、京都の竹原好兵衛が刊行したことが分かる。

版元の竹原好兵衛は江戸後期に多くの京都図や京都の地誌を刊行したことで知られる書肆で、当館でも竹原好兵衛刊行の京都図を、本絵図を含め

山城・京都』（近世絵図地図資料集成第一期第八巻 科学書院、二〇〇四年）に影印掲載されているほか、信州大学附属図書館の「近世日本山岳関係データベース」(<http://www.nsoeajshinshu-u.ac.jp/>)にて画像が公開されている。

これら三種の元治元年絵図について、『京都圖総目録』では、「冬版は政局に合わせ、同一版ながら埋木や削除の補訂がみられ」と、春版と冬版は基本的に同一版であるものの、やや異なる部分が見られるとする。また、平安舎版は「同圖柄なるも異版」とされる。

各藩の京都藩邸の場所に注目して、当館の冬版、京都大学附属図書館蔵の春版、信州大学附属図書館蔵の平安舎版を比較してみると、屋敷位置や屋敷名称の表現は春版と平安舎版が同じで、冬版のみ異なる事例がしばしば見られる。例えば、百万遍の東にある「雲州ヤシキ」が冬版のみであり、春版と平安舎版に無いことなどである。

一方、平安舎版では「チクセン（筑前）」とあるのが冬版と春版では「チクセンヤシキ」となっている（相国寺西の福岡藩邸）など、冬版と春版が同じで平安舎版のみが異なる場合もある。

版元が同じ春版と冬版で記述が同じであることは不思議ではないが、版元が異なる平安舎版の方がむしろ春版に近い点が多い。つまり、平安舎版

で十八点所蔵している。

本絵図の収録範囲は、北辺東が「小野山」（現京都市左京区）、北辺西が「西河内」（京都市北区）、南辺東が「平等院（宇治市）」、南辺西が「男山」（八幡市）である。図は色分けされており、「圖中見出し」（凡例）によれば、赤の二重枠が「宮門跡方」、赤の一重枠が「神社仏閣」、橙が「諸大名屋舖」、黄が「地名」（村名等）となっている。あわせて市街地の各町の町名が通り上に書かれている。

市街地の地名や屋敷名等は基本的には文字のみで示されるが、禁裏御所、二条城、本圀寺、本願寺、東本願寺、相国寺といった主要な場所については建造物の絵が描かれている。また、洛外の寺社や、大文字、鳥居、舟形、妙法、「い」の送り火がともされる山についても、絵で示される。

本図中には「三條大橋ヨリ道法附」が記され、本図の左には、「洛陽七口」、「同間之近道」、「圖中見出し」を印刷した附録がある。

ところで、元治元年に刊行された「洛中洛外町々小名大成京細見絵図」は、大きく分けて三種類存在する。(一)竹原好兵衛の元治元年春版、(二)竹原好兵衛の元治元年冬版、(三)平安舎の元治元年十月版である。本学所蔵のものはこのうち(一)に該当する。

この絵図が刊行された年の七月十九日には、元

は春版の内容にあまり変更を加えずに刊行したのに対し、冬版は変更を多く加えているということになる。変更点が多く発生したために、同じ版元から年に二回も刊行されたのだといえる。

二条城付近



なお、『京都圖総目録』では春版と冬版は「基本的に同一版」とされているが、建造物の絵の部分もやや異なる箇所があり（相国寺の池にかかる橋、千本釈迦堂、北野天満宮、二条城など）、埋木などの補訂は広い範囲で行われているようである。各版の違いについては、更に詳細な比較が必要と思われる。

『洛中洛外町々小名大成京細見絵図』 90×59cm



治大火といわれる火災が京都で起こっている。(二)の元治元年春版は大火前、(三)は大火後の刊行であることから、春版は現存が少ないという(大塚隆『京都圖総目録』書裳堂書店、一九八一年)。(三)（国立情報学研究所）の総目録や日本古典籍総合目録データベース（国文学研究資料館）等で他機関の所蔵状況を見ると、(一)元治元年春版は京都大学附属図書館及び富山市立図書館山田孝雄文庫に、(二)元治元年冬版は国立国会図書館国際日本文化研究センター、京都大学法学部図書室等に所蔵がある。(三)平安舎版は国立国会図書館所蔵本が近世絵図地図資料研究会編『丹後・丹波・

洛陽四十八所地藏霊場巡禮利生記

京都に所在する四十八の地藏の巡礼案内書である。上二冊からなる写本であり、その題箋には「洛陽地藏霊場記」と墨書され、序題は「洛陽四十八地藏霊場巡禮利生記」、目録題は「洛陽四十八所地藏霊場利生記」となっている（以下、「利生記」とする）。



「洛陽四十八所地藏霊場巡禮利生記」上・下

序文末尾には「元文五年かのへさるの春三月十八日」、跋文末尾には「時に元文五年かのへさる七月廿四日」とあり、元文五（一七四〇）年の成立と考えられるが、著者や書写した人物については不明である。各冊には「原水蔵書」、「福善湛教」の蔵書印がある。

「利生記」には、一番の壬生寺・縄目地蔵から四十八番の本覚寺・泥附地蔵まで、洛中の四十八の地蔵（洛陽四十八所地蔵）について、その由緒を記し、靈元天皇の御詠歌を添える。

この「洛陽四十八所地蔵」に関する資料としては、「利生記」の他に寛政十一年刊の『洛陽地蔵廻り記』（東海学園大学哲誠文庫蔵、以下『地蔵廻り記』とする）がある。その序文によれば、「洛陽四十八所地蔵」の由来は、靈元法皇（一六五四―一七三三）が洛中の地蔵菩薩のうち四十八ヶ所を選び、歌を詠んだというものである。

「洛陽四十八所地蔵」を紹介している資料は、この他『洛陽四十八願所地蔵大菩薩順拜手引書』（大正四年刊、寛政二年序）、「地蔵大菩薩四十八体御詠歌」（成立年不明）及び「洛陽四十八箇所地蔵尊詠歌」がある。「地蔵大菩薩四十八体御詠歌」は眞鍋廣濟『地蔵尊の研究』（富山房書店、一九六九年、初版一九四一年）、『釈教歌詠全集』第五卷（東方出版一九七八年、初版一九三四年）、『日本歌謡集成』（東京堂出版、改訂再版一九八〇年、改訂初版一九六〇年）に翻刻掲載されているが、それぞれ底本については示されていない。「洛陽四十八箇所地蔵尊詠歌」は本学所蔵の前川家文書に含まれている写本で、元治二年の奥書を持つ。

「利生記」と『地蔵廻り記』等の内容構成を比較

院の所在地のみを記し、由緒等は記されない。

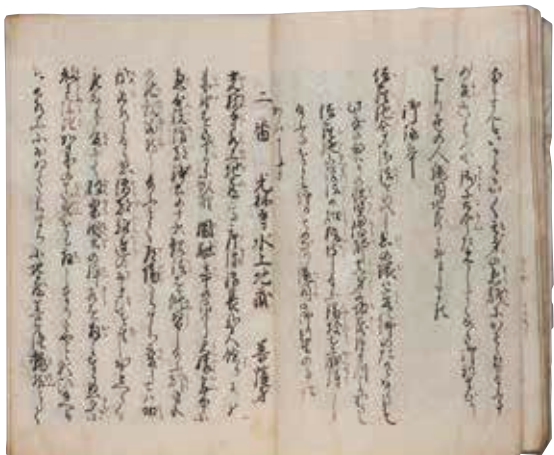
このように、本資料は江戸中期の京都における地蔵信仰の様相を示す資料として、また他資料には見られない内容を含むものとして貴重な資料であるといえよう。

最後に、「利生記」に掲載されている「洛陽四十八所地蔵」を挙げる。

- 洛陽四十八所地蔵
- 壹番 佛光寺通 壬生寺 縄目地蔵
- 貳番 綾小路大宮西へ入ル 光林寺 水上地蔵
- 三番 四条大宮西へ入ル 勸学院 雀森地蔵
- 四番 右東隣 悟真寺 養老地蔵
- 五番 錦小路大宮西へ入ル 休務寺 萬人地蔵
- 六番 蛸薬師大宮西へ入ル 成圓寺 延命地蔵
- 七番 知恵光院下立賣上ル 昌福寺 福地蔵
- 八番 下立賣千本西へ入ル 勝岩院 見願地蔵
- 九番 下立賣千本二町西 祐正寺 妻娶地蔵
- 十番 内野三軒寺西ノハシ 報土寺 腹帯地蔵
- 十一番 北野右近馬場西かわ 超圓寺 跡追地蔵
- 十二番 紙屋町ノ西 地蔵院 昆陽地蔵
- 十三番 北野七本松通 一条上ル 清和院 玉體等身地蔵

して大きく異なる点は、地蔵の由緒記述の有無である。「利生記」には各地蔵の由緒が書かれているが、他書には地蔵の名称と寺院名、所在地が記されるのみである（洛陽四十八箇所地蔵尊詠歌）には所在地の記載もない。

また、地蔵の名称、寺院名、御詠歌について、各書の記述を比較してみると、「利生記」と「利生記」以外の書の二つのグループに分けられる。例を挙げると、三番の「雀森地蔵」は「利生記」では「勸



一番「壬生寺縄目地蔵」の御詠歌と二番「光林寺水上地蔵」の冒頭部分

- 十四番 一条千本東へ入 浄福寺 浄土引接地蔵
- 十五番 知恵光院通 一条上ル 知恵光院 六臂地蔵
- 十六番 千本通五辻上ル 石像寺 釘拔地蔵
- 十七番 千本ノ北上 品蓮臺寺 天神同鉢地蔵
- 十八番 蓮臺寺院内 十二坊の入口 東かわ 逆流川地蔵
- 十九番 柳原玄番町室町通 北西林寺 毬毛地蔵
- 廿番 寺町上 御霊ノ後 西園寺 槌止地蔵
- 廿一番 寺町今出川三町北 佛陀寺 王城地鎮地蔵
- 廿二番 百万遍 知恩寺西ノ門 見付 西光寺 水落地蔵
- 廿三番 神楽岡 真如堂 鎌倉ノ地蔵
- 廿四番 白川橋 庚申堂ノ内 金蔵寺 米地蔵
- 廿五番 二条新地 東寺町 西方寺 衣通姫地蔵
- 廿六番 右同所 西寺町 三福寺 夢見地蔵
- 廿七番 三條大橋 東詰 法林寺 袖取地蔵
- 廿八番 寺町三条上ル 矢田寺 奈落化現地蔵
- 廿九番 誓願寺内 本堂ノ南 江岸院 際 河原地蔵
- 三十番 同南後寺町 光明寺 常盤地蔵
- 三十一番 右光明寺同所 東かわ 妙心寺 醒井地蔵
- 三十二番 右妙心寺すしむかひ 常楽寺 乙子地蔵
- 三十三番 寺町圓福寺内 蛸薬師 北隣 宝幢院 鯉地蔵
- 三十四番 右宝幢院のすしむかひ 清帯寺 腹帯地蔵
- 三十五番 寺町錦小路上ル 了蓮寺 枕返地蔵

学院」にあるのに対し、「利生記」以外の書では「更雀寺」にあるとしている。また、八番の御詠歌「いける身のよそほひしめすみかへりの佛の御影たのもしきかな」（『地蔵廻り記』）が「利生記」では「いける身のよそほひしめす見願の佛の御影いとたのもの」とあり、三十九番の御詠歌「つみなきにしづむひとやのくるしみをゆめにさととして人をたすけし」（『地蔵廻り記』）が「利生記」では「罪なきに沈むこゝやのくるしみを夢にさととしてすくふ御佛」とある。これらの差異は、「洛陽四十八地蔵」の構成自体を変える程大きなものではないが、「洛陽四十八地蔵」の伝播を考える上では参考になるものといえよう。

なお、「利生記」の序文には「今それく縁起を考かへあつめ、（中略）梓にちりはめ、ひろく世に流布せん事をこひ願ふものなり」とあることから、本書の底本が木版本であったか、または木版本を刊行する計画があったと推測されるが、本書と同じ内容を持つ版本は今のところ発見できていない。

さらに、「洛陽四十八所地蔵」とは別に、天保年間（十九世紀中頃）に刊行された京都の地誌『華洛名所記』でも「地蔵廿四ヶ所」が紹介されている。こちらは二十四ヶ所と少ないが、善想寺の子安地蔵や長栄寺の四辻地蔵など、「利生記」に掲載されていない地蔵もある。また、『華洛名所記』は寺

- 三十六番 四条通寺町角 住心院 染殿地蔵
- 三十七番 建仁寺町 四条上ル 仲源寺 目疾地蔵
- 三十八番 松原建仁寺 東六波羅 蜜寺 髪掛地蔵
- 三十九番 六波羅境内 十輪院 夢見地蔵
- 四十番 八坂塔ノ上 十輪院 身代地蔵
- 四十一番 音羽山 清水寺 勝軍地蔵
- 四十二番 東山 渋谷小町寺 玉章地蔵
- 四十三番 大佛耳塚 前北かわ 専定寺 獅子地蔵
- 四十四番 五条下寺町 福田寺 乳房地蔵
- 四十五番 右同所 西寺町 蓮光寺 駒止地蔵
- 四十六番 右同所 蓮光寺 北隣 極楽寺 手引地蔵
- 四十七番 極楽寺 北隣 新善光寺 来迎地蔵
- 四十八番 新善光寺 北隣 本覚寺 泥附地蔵

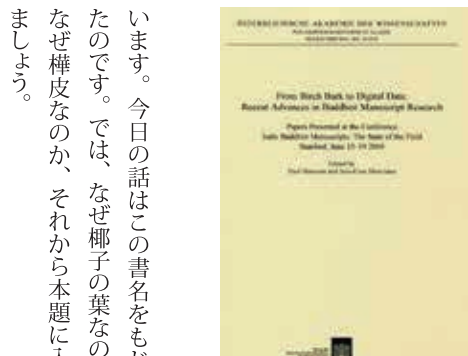
末筆ながら、貴重な資料の閲覧を御許可いただき、また京都大学附属図書館、京都市歴史資料館の皆様、また本稿をまとめるにあたり御助言を賜りました、本学渡邊秀一教授に感謝申し上げます。

椰子の葉からデジタルデータへ

附属図書館長・仏教学部教授 松田 和信

皆さん、こんにちは。私は仏教学部の教員として授業や学生指導に携わっています。私自身の研究では、インド語の仏教文献解読を専門としています。特に現在は一九九〇年代の中頃にアフガニスタンのバーミヤン渓谷で発見された仏教写本に対する解読研究を海外の研究者たちと共同で行っています。二〇世紀初頭、各国の探検隊は競って中央アジアに足を踏み入れ、シルクロードに点在する遺跡から、ほとんどは断片的なものでしたが、インド語で書かれた多くの仏教写本を発見して、当時の仏教研究に大きな影響を与えました。ただ、一九三〇年頃には探検の時代も終わり、大規模な仏教写本発見はもはや望むべくもないと思われていました。しかし、それから半世紀以上を経て、状況は劇的に変わりました。私が解読に携わっているバーミヤンの写本以外にも、パキスタンのギルギットや、パキスタンとアフガニスタンにま

たがるガンダーラから、この二〇年ほどの間に陸続として膨大な量の仏教写本が発見されたのです。発見は現在も続いています。無論これは旧ソビエトのアフガニスタン介入からアフガン戦争を経て現在に至る現地の荒廃と決して無関係ではありませんが、皮肉にもそれによって仏教が栄えた古代の生の資料が私たち研究者に届けられたのです。現在を第二の写本発見の時代と言う研究者もいるぐらいです。このような状況下、二〇〇九年六月、米スタンフォード大学に各国の研究者が集まって、世界各地で行われている写本研究を概観し、情報交換するための会議が開かれました。私も短い研究発表を行いました。その報告書が本になって昨年やつとオーストリアのウィーン科学アカデミー出版局から刊行されたのですが、本には「樺皮からデジタルデータへ(From Birch Bark to Digital Data)」という興味深いタイトルが付けられて



スタンフォード会議報告書 (2014年、ウィーンより刊行)

います。今日の話はこの書名をもじったのです。では、なぜ椰子の葉なのか、なぜ樺皮なのか、それから本題に入ります。

書物のイメージ

文化圏が異なれば書物や文書のイメージも異なります。古代中国や中近東の人々にとって書物とは巻物であり、西洋の人々には現在の本と同じ形でしょう。インドの人々にとっては、それは横長の短冊状のものでした。古代インドでは、文字を書くために椰子の一種



スタンフォード大学に集まった研究者たち(右から5人目が筆者)

であるターラ椰子(日本ではオウギヤシ、パルミフィヤシとも)の葉が用いられました。ターラ椰子の葉を横長の短冊状に切って文字を書きました。これを漢訳仏典では貝多羅葉、略して貝葉と呼んでいます。貝多羅(ばいたら)とは、葉を意味する「パットラ」という語を漢字で発音表記したものです。私たちが英語を片仮名書きすると同じです。それに葉という字を付け足しているのですから、貝多羅葉の意味は「葉葉」ということになってしまいますね。ついでに言うと、佛、菩薩、菩提、涅槃といった仏教用語もインド語の発音を漢字で写しただけです。漢字自体に意味はありません。時代が下って紙が用いられるようになって、インド文化圏では紙を横長の貝葉形に切って用いました。これは近代になるまで変わりません。

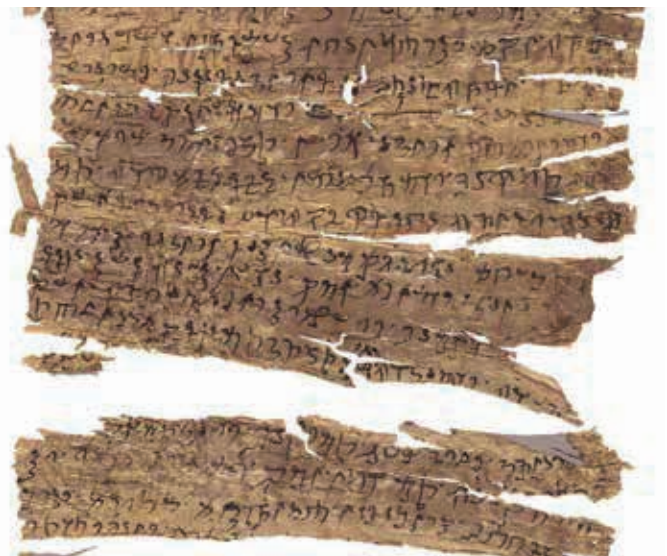
樺皮の写本類はすべて巻物です。その理由は、書写にはカロシユティー文字という中近東のアラム文字に起源を持つ文字が使われ、インド文化圏の影響を離れて、中近東文化圏の影響を受けているのです。実はこれらの巻物は、炭素一四による年代測定の結果、紀元一世紀に書写された現存最古の仏教写本であることが明らかになっています。スタンフォード会議報告書の編者たちも、古代インドなら貝葉であるはずが、現存最古の仏教写本が樺皮であるという意外な事実注目して本のタイトルにしたのでしよう。ではこれら古代インド語で書かれた仏教写本は仏教の開祖ゴータマ・ブツダとどのような関係にあるのでしょうか。

ゴータマ・ブツダと仏教聖典

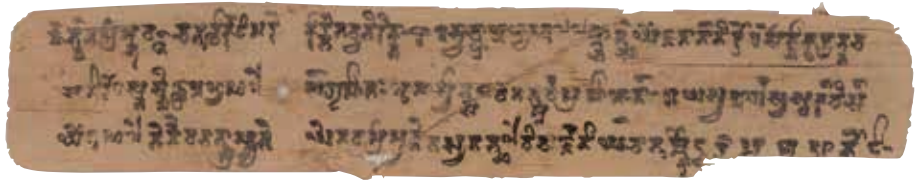
ブツダが歴史的人物であることを疑う研究者はいません。私もそうです。ただこのことは、種々の文献的あるいは考古学的証拠から、私たちがブツダと呼ぶ人物が確かに存在したと言っているだけで、その人物が苦惱から解放された理想の人格者であった。つまり仏教聖典が描き出すブツダという名に



ターラ椰子、タイのアユタヤ近郊で筆者撮影。



カロシユティー文字によるガンダーラ語樺皮巻物 (イギリス・大英図書館蔵、ガンダーラ出土、1世紀)



ブラーフミー文字によるサンスクリット語貝葉写本 (ノルウェー・スコイエン・コレクション、バーミヤン出土、4-5世紀)

値する人であったということを書いてい
るわけではありません。では実際のブッ
ダはどんな人間で、どんな思想を説い
たのでしょうか。これは残された文献
を分析するしかありません。しかし、
文献といつても、やっかいなことにブッ
ダ自身はいかなる著作も残していませ
ん。そもそもブッダの生きた二五〇〇
年前のインドでは、哲学者や宗教家が
自分の考えを著作に残すという習慣自
体がなかったのです。さらにブッダの
話した言語も失われて存在しません。
東南アジアの仏教教団が伝える古代イ
ンド語の一つであるパーリ語の仏教聖典
や、ネパールやチベット、あるいは中央
アジアで発見されたサンスクリット語
やガンダーラ語の仏教聖典など、複数
のインド語で記された仏教文献を私達
は見ることができませんが、それらがブッ
ダ自身の言葉と思想にどこまで肉薄す
るのか判然としません。しかしそのよ
うな文献を通してブッダの思想を推定
するしかないのも事実です。断言して
おきますが、仏教研究とはあくまで文
献研究が基本であって、瞑想したり寺
で修行することから仏教原初の姿が描
き出せるわけではないことも確かです。

経・律・論よりなる仏教聖典（三蔵）

ナーガリー文字に至ります。因みに我
が国に伝えられた梵字は、九世紀頃の
北インドで使用されたブラーフミー文
字に他なりません。研究者は便宜上、
ブラーフミー文字の様々な書体（スク
リプト）を文字名として用いますが、
大きく分けて、インドに文字はカロ
シユティー文字とブラーフミー文字の
二種類しかなかったことになりまし
す。いづれにしても、アシヨーカ王碑文に用
いられたブラーフミー文字、つまりマ
ウリヤ朝のブラーフミー文字こそがイ
ンド固有の文字の原形なのです。

ところで、仏教聖典の伝承は口承か
ら始まりました。それが文字に記され
る、つまり写本による伝承が始まるの
は後の時代です。仏教に限らず、そも
そもインドにおいて聖典の伝承は口承
が基本であって、文字に写されること
自体が例外的な営みであったと言えま
す。しかし仏教聖典について言えば、一
旦写本による伝承が始まると、その営
みはやがて聖典全体に広がり、聖典を
伝える手段として、口承と平行して行
われました。さらに最近の研究では、
仏教聖典を組織的に書写して伝える営
みは、伝統的な仏教教団の文献ではな
く、紀元前後に現れた新たな大乘仏教

はブッダの死後、教団内部で徐々に編
纂されて現在のような姿になったと思
われます。彼の死の直後に開かれた弟
子達の集まりにおいて仏教聖典が編集
されたという有名な伝説も、あくまで
神話学の領域の話であって、史実とし
て評価するに値しません。恐らく今に
残る仏教聖典は、ブッダの死の約一〇〇
年後にインドを統一したマウリヤ朝の
アシヨーカ王の時代から、仏教の長い
歴史が作りあげたものに他ならないで
しょう。しかし仏教の伝統が途絶えた
現在のインドには、仏教文献は全く残
されていません。それらが発見された
のはインドの周辺地域でした。一九世
紀以降、ネパールやチベットから貝葉
や紙に書かれた多くの仏教写本が発見
され、仏教研究を進展させる原動力と
なりました。しかし、そのほとんどは
近世の写本であり、探検家達のもたら
した断片的な中央アジア写本を例外に、
一〇世紀前に遡る写本はわずかしが発
見されていなかったのです。

インドの文字と聖典の伝承

ブッダが生きた時代、彼の活躍した
ガンジス川中流域ではまだ文字は存

の聖典から始まったことが明らかにな
りつつあります。伝統に従って口承が
後代まで維持された教団文献と異なり、
大乘仏教という新たな仏教を広める目
的もあつたと思われま

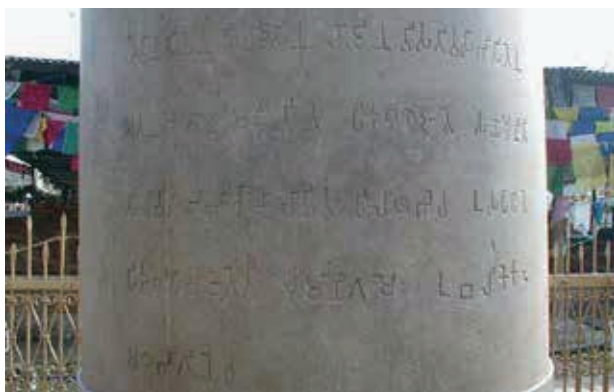
仏教研究の現在

仏教聖典は仏教の広がりと共にイン
ドの外に伝えられ、次々と中国語やチ
ベット語に翻訳されました。現在では
既存のインド語文献や翻訳文献のほと
んどはデジタルデータ化され、ネット
上で簡単に検索することができま
す。写本も印刷された書物も結局は情報を
伝えるデータに過ぎないことが実感さ
せられます。仏教学者もネット時代の
恩恵を大いに受けているのです。しか
し、最近のインド語写本の発見は、今
までの研究を覆す可能性を秘めていま
す。翻訳でしか残っていなかった文献
翻訳すらなかった文献のインド語原典
が次々と発見されているからです。最
初に触れましたが、一九九〇年代の中
頃よりアフガニスタンとパキスタンよ
りインド語の仏教写本が大量に発見さ
れました。そして、それらの写本類は
主としてロンドンの古美術市場を通し

在していません。文字か記号かはまだ
結論が得られていないインダス文字を
別にして、古代インドにおいて文字の
使用が明確に始まるのは先に述べたア
シヨーカ王の治世下です。アシヨーカ
王は仏教による統治を宣布するために、
インド各地に石柱や石版等に刻んだ多
くの碑文を残しました。これがインド
に残る最古の文字資料となります。イ
ンドの年代ははっきりしない点が多い
のですが、アフガニスタンで発見され
たアシヨーカ王碑文の中にギリシャ語で
書かれた碑文が見られることから、ア
シヨーカ王が北インドに侵入したアレ
キサンダー大王（前四世紀）より後の
人物であることは認められています。

アシヨーカ王が残した碑文のうち、
インド語で記された碑文には二種の文
字が用いられています。先に述べたア
ラム文字の影響を受けて作成された文
字で、向かって右から左に読むカロ
シユティー文字、および左から右に読
むインド固有のブラーフミー文字です。
カロシユティー文字は紀元後数世紀
を経て廃れますが、ブラーフミー文字
は、その後のクシャーナ王朝とグプタ
王朝を生き抜いて変遷を重ね、現在の
インドで一般的に使われているデーヴァ

て世界の研究機関や蒐集家に引き取
られてゆきました。中でも、バーミヤ
ン渓谷で発見された写本類のほとんど
を買い取ったのはノルウェーの実業家
マーティン・スコイエン氏でした。私は
一九九七年より海外の研究者たちと共
にスコイエン邸のある首都オスロに通っ
て解読研究を続けています。既に二〇
回はオスロを訪れたでしょう。スコイ
エン氏が入手した写本類は、紀元二世
紀から八世紀に遡る様々なインド文字
を用いて、貝葉、樺皮、獣皮に書かれ
たガンダーラ語あるいはサンスクリッ
ト語の仏教文献でしたが、その総数は
小さな断簡も含めて一万点に上ります。
すでに私たちはこれまでの研究成果を
大冊三巻に分けてオスロより出版しま
した。第四巻も近々刊行されます。既
存の文献をデジタルデータで簡単に調
べることができ、さらに仏教が栄えた
古代の資料を直接手に取って読むこと
ができるわけですから、私たち仏教研
究者はいま一番幸せな時代に生きてい
るのかもしれない。最後に、バーミ
ヤン渓谷から新たに発見された写本類
を皆さんの前のスクリーンで紹介して
私の話を終えることにします。聞いて
いただきありがとうございます。



ルンビニーのアシヨーカ王碑文。ここでブッダが誕生したことを宣言する。



スコイエン・コレクションの出版（現在第3巻まで刊行）



佛教大学附属図書館の事業活動報告

2015～2016年度前半期

2015年度

- 4月 学術情報検索BIBDの利用説明会を開催（2015年12月）。
- 5月 図書館1階新着書コーナーを拡充。
- 7月 独立行政法人国際交流基金の依頼により、ロシア連邦のエルミタージュ美術館、プーシキン美術館で開催される「楽—茶碗の中の宇宙」展に、図書館所蔵の「洛中洛外図屏風」を貸出（11月まで）。
- 8月 図書館2階のマルチメディア学習室を多目的学習室に用途変更し、可動式テーブル、椅子、貸出用ノート・パソコン10台を設置（ノート・パソコンは総合カウンタで貸出対応）。
- 9月 佛教大学教育後援会の援助金により各種事典・辞典および岩波ブックレットを整備。
- 10月 図書館報『常照』第62号を発行。
- 1月 ネットアドバンス社に「Jpan Knowledge Lib」利用説明会を開催。

中央展示テーマ（2015年10月～2016年3月）

- 10月 軍記物語の世界
- 12月 本と蔵書印
- 1月 日記を読む
- 2月 様々な辞書
- 3月 2015年度新収資料展（佛書編）

2016年度

- 4月 学術情報検索BIBDの利用説明会を開催（2016年12月）。
- 7月 企画展示（図書館1階）日本および海外の絵本。
- 中央展示テーマ（2016年4月～9月）
- 4月 2015年度新収資料展（京都編）
- 5月 葵祭
- 6月 宗門改帳
- 7月 祇園祭
- 8月 仙洞御所図
- 9月 内裏図



図書館1階新着図書コーナー前 絵本展示

佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来

佛教大学附属図書館は、佛教大学の前身佛教専門学校があった京都市左京区鹿ヶ谷の地から、現在の京都市北区紫野に移転した1934（昭和9）年11月23日に木造2階建の閲覧室と、鉄筋コンクリート3階建の書庫を竣工落成しました。この図書館建設にあたっては、佛教専門学校初代校長である土川善激師（浄土宗大本山知恩寺68世住職）に深く帰依された篤志家上村常治郎氏のご遺族から多額の寄付をいただき、完成することができました。その後、1963（昭和38）年9月に開学50周年を記念して閲覧室、書庫などが増築され、1972（昭和47）年4月には、開学60周年記念事業として地上5階地下1階建て、研究室を配置した複合図書館棟が完成しました。現在の図書館は、開学80周年の記念事業として、同窓会、鷹陵同窓会などの卒業生、在学生ならび保護者、浄土宗寺院をはじめとした、本学有縁の方々からの多大な寄付によって、1995（平成7）年1月に着工し1997（平成9）年4月に竣工したものです。地上5階地下



『常照』（図書館報）No.1（昭和47年5月～）

昭和47年（1972）4月に竣工した図書館の館報として、同年5月に発行されました。No.2からはタイトルも「成徳常照館」から二字をとって『常照』と名づけられました。

2階建て1000万冊を収蔵することができます。佛教大学附属図書館の建物は、「佛教専門学校附属図書館成徳常照館之記」にある「今ココニ冠スル所ノ成徳常照館ノ名稱ハ（中略）繙書ノ士専ラ徳器ノ成就ニ努メテ智光ヲ常照スル」から「成徳常照館」と名づけられ、書物をひもとく者が努力して、立派な人格者となり、智慧の光をいつも照らすようにという願いが込められています。この木額は佛教専門学校第7代校長江藤激英師（浄土宗大本山善導寺61世住職）によって撰述されたもので、現在は図書館1階に掲げられています。また、同じく1階に設置されている浄土宗総本山知恩院にある八角形の経蔵

「転輪蔵（略して輪蔵）の縮小複製は、1998（平成10）年5月、図書館開館1周年を記念して、佛教大学同窓会、鷹陵同窓会、通信教育部学友会、教育振興会から寄附されました。輪蔵は、1回転させることによって、一切経を誦したことが同じ功德を得られるといわれています。

佛教大学附属図書館報『常照』第63号

発行日 平成28年10月23日
 発行者 佛教大学附属図書館長 松田和信
 発行所 京都市北区紫野北花ノ坊町96
 佛教大学附属図書館
 制作 株式会社栄美通信

後記

佛教大学附属図書館報『常照』第63号をお届けします。紫野キャンパスもリニューアルの最終段階となり、ついに礼拝堂（水谷幸正記念館）が完成しました。蓮の花をイメージした円形が特徴的な建物です。図書館からは、礼拝堂と左大文字が一望できます。図書館長の巻頭言にもありますように図書・図書館をめぐる環境も変わりつつあります。来年、成徳常照館は20周年を迎えます。